

障害者の方と一緒に描くこと

会期中イベント「まちがみんなのミュージアム」 1月20日(土)

ゲスト／渡邊知樹(芸術家)

野尻直亜(かがわ工房)

伊藤安寿華(アートフル・アクション)

進行役／正木賢一(東京学芸大学准教授)



渡邊 週に1回、東村山福祉館の絵画活動で講師をやっています。その他は、水彩画を描いたり、旅をしたり、色んなことをしています。東村山福祉館では、1回で40分くらいの活動で、職員の方が3、4人、利用者の方が10人くらいで活動しています。重度の人がくる施設なので、身体が動かせない人もいます。

正木 アールブリュットやアウトサイダーアートとか、こういう事って物の見方が偏ったり、文脈の中で読みがちだったり、言葉を選んでしまいがちなんですけど、現場の方はもっと純粹にアートをやって、人間同士との交流を考えていらっしゃるんですよね。

渡邊 そうですね。とにかく、何を描いても手を動かしているのが正しいと考える、というか。手を動かせない人もそこにいるのが正しい。手を動かせない人には、筆に絵の具をつけて、どっち動かす?って聞いて、目が動いた方に職員の方が紙を動かす。利用者の人と職員さんが一緒に描く感覚があります。画材や色も自分で選べない人もいいし、自閉症の人だと、自分から何かをすることがストレスの人もいる。そうするとどこからがその人の絵で、どこからが僕の絵で、どこからが職員さんの絵かわからなくなることもあります。あとは、紙の外で起きていることがとても多い。紙を取っても画板に描いていたります。

正木 自分で選んで絵画活動に参加している利用者さんが多いんですか?

渡邊 そうじゃないんです。他の活動に参加できないから、この活動に来る人もいます。絵画活動が嫌いな人もいます。すぐに、帰りたいがる人もいます。人によって、モチベーションをあげないといけない人もいて、職員の人がアソビマンの絵を描いたりしないとかダメな人もいます。全部で3、40人いるんですけど、一人ひとり違うので、最初は本当に戸惑いました。

正木 渡邊さんがやられている活動は自分自身の作品作りに影響はあるんですか?



渡邊 あんなにエネルギーにやられると、影響はありますね。僕は水彩画の抽象画なので、手を動かしてナンボというか、彼らの、手が先に動いているってところはしゅっちゃんマネしています。

あえて「障害者週間」ではない期間に展示する

野尻 東京学芸大学の南側にある生活介護事業



所のかがわ工房です。25名の主に自閉症という障害を持った方たちが利用している施設です。普段は障害者の方が様々な作業をしてお給料をもらっている、障害者の方が通う会社みたいなところなんです。今回の展示を見て、感動しました。最近「障害があってもなくても社会で同じように」って風潮もありますけど、現実はかなり厳しいです。電車一つ乗るのも大変だったり、外食もままならない方たちなので、こういうことをする発想もなかった。乗り気じゃないわけじゃないけど、雲をつかむというか、現実的じゃなかった。最初、アートフル・アクションさんから話が合った時に、「障害者週間にあてようかと思うけど、それはやめようと思う」って言われて、なん

のことがわからなくて…。障害者週間にやったら「この人は障害者」って認めることになるので、あえて障害者週間と関係ない時期にやって、障害があるうがなろうかという表現活動について理解してもらって話があって。我々は明確に「障害者を支援する」視点でやっているの、で、びっくりしました。

正木 アートフル・アクションは、障害者週間のサポートもやってきたんです。作品として観てほしいって意識が僕らにはあるんですけど、冠に「障害者週間」ってついているとどうしてもそういう目で見られてしまう。毎年面白い絵が集まってきた、面白かったんですけど、文脈でくられちゃう事は難しい障壁なのかなって思ったりします。

伊藤 絵を見て下さい、ではなく、まちと一緒に活動を楽しんでいる、こんな人たちがいるんだってことを私は伝えたいんです。あとは、かがわ工房のメンバーとのやりとりの中で感じることは、特別なことじゃなく、アートフル・アクションで行っている他のプロジェクトの現場や自分のこともとの関わりの中で起きていることと何ら変わらない事がたくさんあることも伝えたい。あとは、一緒に表現する楽しさを、大きな紙を通して共有できるって思っていて、まちの風景を大きな紙に描くアップデートミュージアムを企画しました。そうすると、幼稚園の子がきて、飛行機とか



伊藤 色々悩んだけど、ここまで来たんですけど、やっぱり当事者とか職員さんみたいな責任を持って活動しているわけじゃないし、実際の大変さとか困難さとか苦しさをよってない。でもそういう私たちができることを一生懸命やることに意味があるのかって、悶々としたなで歩きついたらそこでした。誰でもみんな表現することは楽しいと思う。そういうことを伝えるために、私たちができることはやっていきたいと思っています。

作って持って帰りたいってごねたり、フラワー工房の人たちが遊びに来て、普段絵を描かない方まで楽しそうに描いてくださいました。

障害者の方の展示を考える難しさ

菊地 市民スタッフとしてこの展示に関わったんですが、楽しただけじゃなかった。友人の義理の弟が重度の障害を持っているという話を伺ったばかりだった事もあり、実はこの展示を考えているときに、薄っぺらいなって、これいいのかな、って迷いながら作っていました。でも、色んなやり取りや迷いの中で、ふと、障害者だからと考えすぎるより、もっと自由に、当事者ではない

私ができる展示をできたらいいなって思えました。会場から 重い障害があった義理の弟が作業所のアートの時間で作品を残していました。11月に亡くなって、作品が出てきて。どこまで本人が描いたかわからないけど、家族はすごく嬉しかった。こんなにすばらしいものが作れるんだなって。薄っぺらいって話がありましたけど、家族にとっては真剣に考えてやってくれるのは嬉しいことなので、こういったことがもっと広がって行って、距離が近づいて行くといいと思いました。

宮下 小金井市の芸術文化振興計画の中で、市民の人たちが自分たちで工夫しながら活動していけるようになるための活動をする、という項目があります。今回企画に参加してくださった3人の市民が、見栄え良く展示しましたというより、悩んで、ダメ出しされながら階段を一つ一つ登ったり、迂回路を見出しながら何かを伝えようとしていくという時間が大切だと思っていました。単にかがわ工房さんの絵を借りてきて展示することとは成り立ちが少し違うのです。

野尻 さっき「こういうことをやる発想がない」という話をしたんですけど、実際はなかなかできないんです。私はギターが好きなんですけど、施設で前に出て弾こうとすると、じゃあその職員の出番の間は利用者さんのケアは誰がするの?ってことになる。だから外部の専門性を持った人が引っ張ってくれるのは感謝しているし、すごいと思うんです。薄い、とか私たち何もできていないって話があったんですが、普段障害者の人たちと接している人が偉くて大変とかそんな事は何もないので、そこは役割分担として「私こはやるわ」、でいいと思います。

伊藤 色々悩んだけど、ここまで来たんですけど、やっぱり当事者とか職員さんみたいな責任を持って活動しているわけじゃないし、実際の大変さとか困難さとか苦しさをよってない。でもそういう私たちができることを一生懸命やることに意味があるのかって、悶々としたなで歩きついたらそこでした。誰でもみんな表現することは楽しいと思う。そういうことを伝えるために、私たちができることはやっていきたいと思っています。

渡邊 これまでお話を聞いてきて、感じたことを最後に二つ。さっきの話の中で、障害者週間にあえてかぶらせないって話がありましたけど、僕はむしろそういうことをどんどん利用してもいいのになって。障害者週間だから、障害者の展示だから行くっていう感性を、あえて間口を広げるために考えて使うっていうのも方法としてあるんじゃないかと思いました。あとは、自由にどんな描いて楽しっていくこともありましたけど、本人を自由にするために、こちらが不自由を与えてみる意識もありませんじゃないかなって。自由を引き出すために、意図的にしかけることもあっていいんだらうなって、関わりの中で思ったりします。(丁)

まちはみんなのミュージアムだより

特集

まちはみんなのミュージアム

かがわ工房編

2018年1月16日(火)～1月21日(日)



窓をつくる、そのさきに



開催概要

会場中央には、「アップデートミュージアム」として、大きなクラフトロール紙が置かれ、会期中に来たお客さんが、自分のまちの絵を自由に描き加える事ができるようにした。展示初日には、かがわ工房のメンバーが会場に訪れ、思い思いのまちの絵を描いた。また、1月20日(土)にゲスト、スタッフ、来場者、の皆で話し合う座談会を開催した。

小金井アートフル・アクション!は「だれもが芸術文化を楽しめるまち!」の実現をめざして2009年にスタートしました。まちは、そこに暮らすみんなのミュージアム。「まちはみんなのミュージアムだより」では、おどろきと発見、わくわくする活動のようすを伝えます。

主催：東京都／小金井市／アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)／NPO法人アートフル・アクション
企画制作：NPO法人アートフル・アクション
※本事業は「小金井市芸術文化振興計画推進事業」及びアーツカウンシル東京「東京アートポイント計画」の一環として実施しています。

KOGANEI
ARTFULL
ACTION!
NEWS LETTER
JULY.2018
VOL.05
《TAKE FREE》



私たちは3年前から、小金井市内にある社会福祉法人 雲柱社かがわ工房で、月に2回ほど利用者のみなさんと一緒に工作や絵を描くアートの時間を重ねてきました。2018年1月には、この時間に作った作品を中心に再構成した展示「まちはみんなのミュージアム かがわ工房編」を開催しました。

巷ではオリンピック開催を目前にして障害者の芸術表現に注目が集まり、「生の芸術」を意味する「アールブリュット」や「アウトサイダー・アート」といった言葉もよく聞かれるようになりました。なぜ障害者の表現を展示するのでしょうか。私たちはなによりも「障害者」という記号としてではなく、同じようにこの時代に生きている一人の人として、特別な名付けやレッテルのもとではなく、その人自身に向き合うことについて考えました。

自分の中にある、障害者に対する自分とは違う、大多数の普通とは違うといった意識にも目をそらさずに向き合い、なぜ差別が生まれてきたか、その構造からも学ぶ姿勢を大切にする必要も感じています。社会の中のさまざまな断絶や何かと何か、誰かと誰かを隔てる「障害」は、依然として存在します。自分以外の人のありようへの理解は容易ではなく、時に道を間違えることもあるかもしれません。けれども、今の社会の状況や自分自身に正直に向き合い、多くの人々との関係を更新していく試みを繰り返すその先に、もしかしたら、私たち一人ひとりをもっと大切にできる社会をつくるヒントが見えるかもしれません。そして、この試みの先にはこれからの社会の可能性を指し示すものがきっとあると考えました。「まちはみんなのミュージアム かがわ工房編」は、私たちにとって、その関係のスタートと言えるのかもしれません。

この展示の会期中に、障害者支援施設の絵画活動の講師をしている美術家の渡邊知樹さん、かがわ工房の職員の野尻直亜さんをゲストに、展示への来場者、施設の利用者と造形活動を進める市民スタッフ、展示を企画した市民スタッフとともに座談会を行いました。

また、障害者支援施設アルス・ノヴァなどを運営する久保田翠さんと市民スタッフは、この展示をきっかけに、今の社会における障害をめぐってディスカッションを行いました。本紙では、それらの記録を通して、どのようにして多様な人びとが出会っていくために窓を開くことができるのかを考えます。

小金井アートフル・アクション!とは(小金井市芸術文化振興計画推進事業)

小金井アートフル・アクション!は、2009年4月に「誰もが芸術文化を楽しめるまちー芸術文化の振興で人とまちを豊かに」という理念を10年間かけて実現することを目指して始まった小金井市の計画です。この事業は、市民がアートと出会うことによって日常生活の中に新たな発見をし、自らの潜在能力に可能性を見出すこと、そして、それが心豊かな生き方を追求するきっかけとなることを目指しています。そのために、次に示す3つの方針を定めています。

- 1.毎日の暮らしの中で芸術文化活動に出会う機会を整備し、活動を支える基盤をつくること
- 2.市民のみなさんが活動を実践することのできる場をつくること
- 3.活動と一緒に担っていく人々が学びながら、体験しながら活動できる機会をつくること

この理念と方針により、市内にアーティストを招き市民のみなさんと街を舞台に作品の制作や発表をしています。特に2013年度からは、保育園や小学校、市内各所を舞台にアーティストや子供達、市民による豊かな体験の場と機会をつくる活動がひろがっています。この事業はボランティアの市民のみなさん、小学校、保育園などの教職員のみなさん、近隣NPO等が協働してすすめています。小金井市芸術文化振興計画の計画書は以下から見る事ができます。
URL <https://www.city.koganei.lg.jp/kankobunka/453/geijutubunkasinkou/geijutubunkasinkoukeikaku.html>

“展示”から“窓”に ～「かがわ工房展」から生まれるもの～

ディスカッション 1月19日(金)

久保田 翠 (NPO法人クリエイティブサポートレッツ)
戸館 正史 (愛媛大学社会共創学部寄附講座教員)
伊藤 安寿華・宮下 美穂 (NPO法人アートフル・アクション)

profile

久保田 翠
認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ代表理事
東京芸術大学大学院修了後、ランドスケープデザインの
仕事に従事。1994年に長男の出生、子育てをきっかけに、
2000年にクリエイティブサポートレッツ設立、アート
を通し社会包摂の実験の場として、2010年障害福祉
施設アルス・ノヴァ、2014年たけし文化センターのヴァ
公民館、2018年たけし文化センター通尺町(仮)開設。
http://cslets.net

障害者の居場所をつくる NPO 法人レッツの活動

久保田 現在私は静岡県浜松市で、NPO法人
クリエイティブサポートレッツ(以下、レッツ)を
主宰しています。レッツは、障害や国籍、性差、年
齢などあらゆる“ちがひ”を超えて、人が本来もつ
“生きる力”や“表現する力”と出会う場所や機会
を提供することで、誰もが共生できる社会づく
り、まちづくりをめざす団体です。その文化事業
の大きな柱のひとつとして、2016年度から「表
現未満、」というプロジェクトを行っています。そ
もそもレッツは、重度の障害のあることもをもつ、
私たち家族の居場所づくりから始まりました。
健常で普通に仕事をし、暮らしていた私たちが、
障害のあることもをもったために突然これまでの
コミュニティを失い、社会から周縁化してしま
う。それを補完するために、2000年の立ち上
げ以来、主に障害をもつ人たちのための場所づ
くりとこだわって活動を展開してきました。閉
ざされた施設ではなく、町の中で開かれたオルタ
ナティブスペースをめざす「表現未満、」もそのひ
とつです。昨年は「光を観る」と題し、美術や音
楽、トークイベントなど、さまざまなかたちで「観
光」を表現するプログラムを展開しました。こう
したアート活動は、特別な人が特別なこととして
やるものだと思うがちで、私たちが「アート活
動をしています」というと、「ああ、そうなんですか」
って、そこで「私には関係ないバリア」がで
てしまう。ですから最近では「アート活動」とは言
わないようにしています。それくらいアートは、
一般の人たちにはなじみが薄いんですね。一方
で、アートはアーティストがつくるものと思わ
れていて、特別な人が何か表現するということに
なってしまふ。とくにそれが障害者であれば、障
害者だからこそこの「アール・ブリュット(生の芸
術)」であるという「読み替え」が、簡単にできてし



伊藤 今年、2018年1月16日か
ら21日まで、私たちNPO法人ア
ートフル・アクションが主催して、小
金井市内の生活介護事業所「かが
わ工房」のメンバーが制作した作品
を展示する「まちはみんなのミ
ュージアム かがわ工房編」を開催し
ました。私はその企画や、会期中に工
房のメンバーと市民が共同でまち
の絵を描き加えていく、「かがわ工
房のみんなとまちをつくらう」と
いうイベントを企画しました。「か
がわ工房」は自閉症や知的発達に
障害のある人たちを支援する事業



まうわけです。けれども、表現できる人がスゴイ
とか、その表現に価値があるとかではなくて、誰
かが素々とやっていることや、すごくくだらな
くて、誰からも取るに足らないと思われている、
その人が一生懸命やり続けていることは、すご
く価値があるんじゃないか。それをちゃんと評
価したいというのが、「表現未満、」なんです。私
の息子は1歳の頃から容器に石を入れて叩き続



けていて、今21歳になってもやっているんですが、
それは誰からも評価されません。でも寝る時以
外の時間は、ずっと叩いている。学校では問題行
動として容器を取り上げられたりしたけれど、絶
対に止めないで、むしろ叩き続けたために他の
ことをがんばるわけです。ある時私は先生に、「こ
の子には叩き続けるの方が大切なんですよ」
と言ってみました。先生は最後までわかってく
れなかった。そんなエピソードが「表現未満、」
というプログラムにつながっていきました。本
人がどう思っているかはわかりませんが、彼にと
って最も大切なモノややりたいコトを、取るに足
らないと打ち捨ててたままでいいのか。その扱い
を決めるのは先生なのか、社会的規範なのか……。
ではないのなら、くると変えてぜんが認めたら
どうだろう、と。それはきっと人権の問題にもつ
ながるのだと思います。障害のある子たちがび
ょうん跳び続けているとか、ひたすらわーわ
ー騒いでいるとか……。そういうことも彼らの人
格の表れだし、もしかしたら文化かもしれない。
そのくらい価値観を大きく広げたいと思ってや
っています。それは、豊かな社会を築くことにも
なるんじゃないかと。

誰かの“作品”を“展示”する ということの意味

久保田 わざわざ障害のある人を招いて何かを
しようというプログラムは、それだけで“特別な
コト”になってしまいます。そこでわざわざ絵を描
くことも、“特別なコト”ですよ。最近では、文
化やアートの特性を生かして、社会的な孤立や
困難を抱える人に社会参加の機会を開くよう
な取り組みを社会的包摂なんて呼ぶようですが、
私たちの活動をそんなふうには括られると、め
ちゃめちゃモヤモヤしてしまいます(笑)。



久保田 私はいつも、展示する意味とは何なのか、
考えています。展示は、つくることの意味よりも、
見せることに意味がある。とすると伊藤さんは、
何を見てほしいと思われたのでしょうか？

伊藤 私は「まちはみんなのミュージアム」とい
うテーマの下に、保育園だったり小学校だった
り、事業所だった、一年を通していろんなところ
で「アート活動」として展開しているアートフル
・アクションの活動の、その“空気”を展示したい
と考えています。今回の「かがわ工房編」でも、作
品を見せるというよりも、彼らの表現したい、表
現するのが楽しいという、“空気”が伝わるよう
な展示ができればいいな、と。そのためには何
か展示するものが必要で、結果的に作品が展示
されたというこただと思います。展示した作品は、
普通のアートの時間の活動ごとに出されたテ
ーマに沿って制作したものです。一人ひとりの作
品を展示するというよりも、テーマに対して全
体がひとつの作品であるような感じで見せたい
と考えて、ああでもない、こうでもない、きりぎり
まで試行錯誤してまいりました。作品に付けるキャ
プションにもずいぶん苦心しました。キャプショ
ンづくりでは、制作の時のやりとりとか、起こ
った出来事などを思い出して、彼らが楽しんで
いる様子や、その場の“空気”、生きている感じが
少しでも伝われば、と思ってまとめています。な
かなかそこまで伝わりませんけれど、ね。でも少
なくとも、彼らが何かしら“特別”に見えないよう、

また作品も、「アール・ブリュット」として制作
されたものではないことなどは、観る人にはちゃん
と伝えたいと思いました。

久保田 私はそこは本当に難しいと思っていて、
“作品”や“展示”と言ってしまふと、「それは誰が
つくったものか」が問題になるけれども、とくに
障害者の場合はその“主体”が見えにくいんですね。
障害者自 のことが伝わらないんじゃないでしょ
うか。まあ、それだけでも伝わればいいのかもし
れませんが……。

“主語”がしっかり見える 展示会をめざす

久保田 今回の展示会では、伊藤さんが「かが
わ工房」を見て、「ああ、この空気、すごくいい」
って思ったわけですから、それを伊藤さん自身がし
っかりと伝えてくれればいいと思う。それを「彼
らのため……」なんて言うてしまふと、ぼやけて
しまふ。展示したいと考えたのが工房のスタッフ
なら、そのスタッフが、自分がぐつきたこと、感動
したことをしっかり見せてほしい。そうじゃない
と御為ごかし、気持ちの悪いものになってしまう
んです。障害者が参加するプログラムの多くは、
「一緒にやりました」「素敵でした」、で終わっ
てしまふ。そこには、健常者が障害者に接する時
に普通を感じる“とまどい”すら、まったく出で
ません。けれどもたとえば展示の場合だったら、企
画者が責任をもって「私はこう感じた」というこ
とをパンパン出していった方が、むしろ障害者
を理解しているんじゃないかと考えています。レ
ッツでは、あまり展示はしません。めちゃめちゃ
面白くするのは、制作の時のやりとりとか、起こ
った出来事などを思い出して、彼らが楽しんで
いる様子や、その場の“空気”、生きている感じが
少しでも伝われば、と思ってまとめています。な
かなかそこまで伝わりませんけれど、ね。でも少
なくとも、彼らが何かしら“特別”に見えないよう、

したり、かと思うとニコニコしたり……。それに
私たちはぐつときやう(笑)。私は彼らのつくる
モノは排泄物だと考えています。ですから、そん
なものをありがたがられてもしょうがない。障害
があるからといっても、普通に友達を理解するの
と同じで、いいことばかりではありません。暴
れられたり、殴られたり、それも人間だから起こ
ることで、それも含めて人と向き合うということ
でなければ、「社会包摂」という気持ちの悪い言葉
にどんどん回収されてしまふ。“良いこと”をし
ている気分が文化やアートをやっても、何にも
ならない。と、“私”は考えています。この、“私”
という主語が大切なんです。レッツでは、2012
年に「佐藤は見た!!!!」という展示会を開催し
ました。2010年に開設した障害福祉サービス事
業所「アルス・ノヴァ」の利用者さんの行動を、ス
タッフである佐藤が、そのぐつきたところをド
キュメントするというもので、ですから主語は「佐
藤」で、責任は私たちスタッフにあります。わりと
反響が大きかったのですが、とくに知的障害を

もアリだけど、それによって“特別感”も出てしま
う。私たちはその“特別感”を警戒するけれども、
“特別”な障害者だからやるというプログラムは、
世の中に多いですよ。

宮下 “展示”という形式になると、“特別感”が
あたりまえになって、そこに対する慎重さがす
っぽり抜け落ちてしまう危険性があると思います。
今回の展示の作品の設置で、はじめは白い四角
い紙をそのまま並べて展示しようとしていま
しが、白い四角い紙にはとても違和感を覚え
ました。深夜に伊藤さんに、世界に四角はないん
じゃないの、とメールしたり。そこに象徴されるこ
とを丁寧に考えたいと思いました。

久保田 ギャラリーという空間もそうですよ。
展示するための空間なので、「展示しなきゃ」と
いう気持ちになってしまふ。そういう空間と障
害は本当につながらなくて、考えれば考えるほど、
展示ができなくなってしまう。これはちょっと“特



もつ人たちを対象とする場合には、そんなふう
に、すごく気を遣う必要があると思います。

宮下 私も“作品”と呼んだり“展示”をするこ
とには、ずっと違和感をもち続けてきました。か
がわ工房は、同じまちと一緒に暮らして、私も
工房に2年間通って知り合って、散歩に出会
たりすると手を振ってくれたりして、それが結構
楽しかったりするんですね。そんなふうには彼
らと出会うインターフェイスがこの町に生まれ
たらいなと考えて、伊藤さんにこの企画をも
ちかけた経緯があります。“障害者”の“作品”の“展示”
は、いちいちカッチに括って展示するのではなく
て、そんなふうには町なかで手を振り合うよう
に出会えればいい。それが障害者であるか健
常者であるかということはあまり関係ない
と考えています。一人で生きて寂しいときに、誰
かと会えればいいですよ、それと同じかな
って。そんな感じで始まったアートフル・ア
クションの活動ではありましたが、今、久保田
さんのお話をうかがって、私たちの“伝え方”
をもう一度見直してみたいと思いました。

“展示”よりも、“窓”をつくる感覚で……

久保田 アートフル・アクションは、「シャトー」
という場所をもっているのが良いですね。カ
フェがあって、私が行った時には、ご飯を食
べている人もいれば、奥では子どもを遊ば
せているお母さんがいて、親御さん同士で
「なんかやろう」って、すごく楽しそう
な話をして、面白い場所だと思いました。そ
れも作品だと思うんですよ。ここで起こるこ
とをドキュメントして展示すること

が外から見えるようにしたいと考えてつくられ
ていますね。それと同じでレッツの展示は、
空間をそのまま持って来て、ぼんと置く。そ
こに“窓”をつくるというか、“窓”ごと移動
してきたというか……。 “展示”をどんな
ふうにするかを考えるより、見るための“窓”
をつくることを考えればいい。その点ア
ートフル・アクションの「かがわ工房編」は
オーソドックスな展示だし、いろいろな制約
もあって、工房の生活が今ひとつ見えてこ
なくて、“窓”にはなってなかった。方法
はトライアル・アンド・エラーを重ねて探
っていきありませんが、向き合い方のマ
インドは、レッツに学ぶことも大きいと思
います。

日常と地続きの 文化・アートをめざして

伊藤 余談ですが、私たちが3年間担当して
きた「かがわ工房」の“アートの時間”で描
いた大きな絵を、年に一度のバザーの時、休
憩室に貼り出してくれました。アートの時間
として“切り取られた”ままにしておく
のではなく、こんなふうには日常と地
続きの場所で使われるのは素敵ですね。今
回は展示として彼らの日常を“切り取っ
て”しまいましたが、彼らの日常の一部と
して地続きになるようなかたちをめざせ
ればよかったかな、と思います。

戸館 “切り取る”ことに価値判断と選
択が含まれるので、「かがわ工房編」では、
その作為性と無作為性の間の伊藤さんの
ゆらぎが垣間見えました。工房のメンバ
ーだけではなく市民の方たちも含めて、
関わった人たちのメンタリティが、もっ
と一緒になって見えてくるといいと思
いました。

宮下 “特別”な工房のメンバーたち、
じゃなくて、みんなと一緒にやっている生
々しさが、もっと漏れ出してきていいで
すね。でも、工房のスタッフにとっては“特
別”な利用者さんが、外に向けて“特別”
なことをする、という感覚でスタートした
プロジェクトでしたから、彼らにとっ
てはその感覚を見直す大きな経験になっ
たと思います。

久保田 それは大切なことです。展示がう



まくことより、そこに参加した工房の
スタッフがアートと出会って、考え方や
見方が変わったり、「こんなこともやっ
てみよう」と思えること、はとても大
きな成果だと思います。

戸館 伊藤さんの言うように、アートの
時間が“特別”な時間じゃなくて、
普段の日常や作業の時間と地続きなん
だと、スタッフがそういうマインドにな
るといいですね。

宮下 少なくとも絵を描かせる、工
作をさせるというマインドではなく
れば、アートの時間だけじゃなく、
普段の日常や作業のあり方ももっ



と面白く変わっていくでしょうね。

久保田 今の文化やアートは、“特別”
な人たちの“特別”な活動になってしま
っていて、日常や作業にも文化やア
ートがあることを考えたこともない
人が多い。「私には関係ない」って、
だからびつくりされようが嫌がら
れようが、文化やアートの日常を
“切り取って”しまいましたが、
彼らの日常の一部として地続き
になるようなかたちをめざせば
よかったかな、と思います。

伊藤 もうひとつ、今回の「かがわ工
房編」を実現して良かったのは、
工房のメンバーみんなに、初
日の会場に来てもらえたこと
でした。みんな食い入るように
作品の一つひとつを見て、手
を当ててみたり、つくった時
の話をしたり……。みんなと
てもうれしそうだったのが印
象的でした。その喜びを共有
できたのは、私にもうれし
いことでした。

久保田 それはね、ギャラリーに行
ったり、映画に行ったり、普
通の人ならあたりまえのこと
も、障害者にはなかなか
できないことが多いです。
つまり、そんなこともできな
いくらい、社会的に閉じこめ
られている現実もあるん
です。今回の展示が、彼ら
の足をギャラリーに運ば
せるきっかけになったとい
うことはよかったと思
います。むしろ絵を描
いたり展示しなくても、
一緒に電車に乗って遊
びに出かけるだけでも
いいかもしれません。
工房のスタッフだっ
て、いつもすごく緊張
してメンバーたちと
接しているはずで
す。ですから「かがわ

工房編」ではスタッフも解
放され、メンバーと一緒
に楽しむことができた。
貴重な機会だったに違
いありません。アート
がそういう体験を提供
できたのは、素晴らしい
と思います。今後、
工房のスタッフがア
ートフル・アクション
に遊びに来るとか、
そのついでに絵でも
描いて帰るようなこ
とが起こったら、大
成功だと思います。
(了)

